

神 光 院 詣 で

——蓮月尼のことゝも——

藤 堂 恭 俊

秋晴の一日學校の歸り、蓮月尼が晩年の餘生を塵の外の靜寂の宿に隱棲したと聞く、西加茂の神光院を訪ねた。澄みきつた高い空に雲の小波を仰ぎつゝ、東に遠く比叡の秀峰を眺め、西北には北山一帯の青巒が幾重にも起伏し、路傍には穂先重しきまで垂れた稻田から吹く穗風に扇ふがれ、一足々々道行く毎に連山の迫るのを覺へた。腰に紺の巾廣の前垂れを纏ふた道行く女に、田舎の情緒を與へられた。

櫻が兩側に植へられた參道を通り、美しくはき清められた山内に入る。天候の具合か思つていたより清らかな明るさがあり、寂しさも云つた氣持がない中にも、何處か昔を偲ばせる高尙な優雅な氣持が漂つてゐた。靜かな山内に、落葉を誘ひつゝ來つた秋の日に、一葉の落る枯葉一つにも秋の哀愁を感じる時、秋の夕陽に包まれながら、あくまでも潔らかに一生を送つた聖蓮月尼の遺香を慕ひ尋ねる時、感慨無量であつた。

のび／＼した碧緑の蓮の葉に宿つた夜露は爽かな日輪の直射を浴びて、その光彩は水玉の如く秀麗そのものであつた。葉を揺する涼風のいたすらに死の舞路を演ずる秀麗の水玉も、遂には咬々々吝しみなく世を照す秋の夜の月を宿す運命を持つてゐた。

〔一〕

いろも香もおもひ捨たる墨染の袖だにそむる今日のもみぢは

— 尼になりたる秋色ふかきもみぢを見て —

蓮月尼の前半生涯こそ實に波瀾曲折多く、清く抱いた夢も脆く消え去り未敷蓮華そのものゝ様であつた。

文政六年夫古肥の死に遇ふてより永遠に變らざる親しきものを求めて、自から髪を薙つて塵世の思ひを絶ち、父共
に華頂山中の眞葛庵の人となつた。此事は唯夫古肥の死に其端を發したものではなかつた。抑々尼が人生の孤客となり
たる其時に初り、幼くして慈しみ深い兄賢古、慈愛溢るゝ養母を失ひ、迎へた養子の放蕩に弱い胸をつかれ、愛兒天
折の上下顛倒に悲しみ、固く結ばれた契りは解れ胸の張り裂けるを覺え、あくまでも潔らかに貞節を持ち續けんとする
尼の固い決意は、老ひ行く父共家庭の事情を思ひ眺める時涙を呑んで再び養子を迎へる事となつた。然し此事は尼も
輕々しく容易には許さなかつた。熟慮に熟慮した深い省録の上であつた。かく思ひ惱んで迎へた養子古肥はよき人であ
つたが四年足らずのわずかの中に不歸の客となつた。

是の如き惱みの中に光を求めゝても遂に得られなかつたけれど、尼は不逮の屬ではなかつた。蓮月尼ならばこそ、
あの聰明な頭腦であつてこそ、恐ろしい死による解決を遠ざけ、どこまでも潔く心の底まで穢れを打ち離れた日送りを
する爲に寂光の尼の境界を選んだのであつた。泥池に潔く咲き誇る蓮の華こそ蓮月その人の様ではないか。

西方の淨土を願ふ父西心、蓮の葉の露に宿る月の様な清淨な蓮月尼の十幾年かの念佛生活は、尼の孝養共共に幸
福に靜寂の宿眞葛庵に送られた。吉水の流れに潔められ、念佛看經をこゝし、或は風月を不請の友とし吟詠に耽つて
ゐた頃の詠歌に、

もゝこせもむ月の末のいつかまで待しみのりにあふぞうれしき

吉水のながれの末のひろがりて四方にみちたる法のたふこさ

なごその頃の尼の心境が歌はれてゐる。實際此一時こそ尼の一生を通じて一番幸福な時であつた。

然しこうした日暮の中にも、尼の秀れた美貌風手に惑はされた人もあり又、或る時は祇園の妓女娼婦まで罵られた事もあつた。尼の心持は唯自分が他に罪惡を賣つてゐるに云つた思ひの中に、一途に懺悔の念を起し又自分の罪惡の強きを悲んで眞珠の如く美しい齒を抜いたに云ふ尼の心を察する事が出来る。

三千大千世界廣しに雖へぎも尼の一生の憑みとする父入道西心の淨土往生こそ、尼の一生の悲哀の極地であつた。西心をいいますが如く懇ろに埋めた去り難い華頂山中の庵に、心引れながらも「なく／＼かぐら岡ざきにうつりぬ」とある。庵を去れば其日より求めねばならぬものは生活の糧であつた。それにかへて庵の生活は細々ながらも餓孚の懼れはなかつた。尼が日頃身に覺えた、選擇に困る程多くあつた藝が身を助けるに充分であつた爲か、庵を出る事はさほゞ氣懸ではなかつた様である。庵を去るには深い譯柄があつた。

それは眠れる平和から生々とした血のかよつた道を求めたあけくであつた。徳川幕府がキリスト教潛入を恐れ鎖國の政策をこるに共に、一方佛教を大いに保護した結果、佛教各宗によつては如何にも幸福の様であつたが、其眞の生命を奪ひ去られ、佛事法會を其すべてとし、美しき殿堂の守りをこゝしてゐた其中に、尼の如く眞に道を求めた潔い人が住める安住の地ではなかつた。心の親しさを求めて山間幽谷の人里遠く離れた所に行かねばならなかつた。尼も其所に聖なる寂光の生活を見出したのであつた。

然しそれは唯滅罪に隱遁の爲の生活ではなく、世の穢れの中に身を入れる即ち、尼の小さい胸中に色々な世界を宿す事によつて、眞實の潔い自己を見出す爲の生活であつた。晩年に神光院の人になつたのもやはり其意味の生活で、唯尼が愛國の勤王の國士であつた爲幕吏の魔手から逃れる爲の隱遁であつた。それは尼が安政、慶應の饑飢に際して、尼

まして勢一杯の金を救済資金として寄附してゐる事に據つても明らかである。

〔二〕

泥土の中から脱け出で、濁りに染まない蓮葉の露に宿る月を名に持つ尼が、實際多難な人生に直面してよくその艱難の路を越へ過ぎ、心は浮世の常を捨て、一段より高い境地を宿し、持つて生れた潔く高い心の中に、ここに觸れては清らかに優しく、三十一文字の和歌を蕩々につきせぬ詩魂から流れ出されたのが常であつた。かく底知れぬ高く潔い心を通して詠れた和歌は、あくまでも潔く世の群萌中に華咲く優曇華の様であつた。

去り難き庵を後に身を雲水の輕きに托した尼の生活は實に哀れなものであつた。今此所に平家物語、灌頂の卷の言葉を借るならば、蔓破れては霧不斷の香を焚き、樞落ては月常住の燈を掲ぐ云つた荒屋の住居であつた様に見受けられる。

こうした日ぐらしの中に、月の光が益々冴へ秋の長い夜がしづまり返へる時なご月前の虫を矜哀して感傷的な秋の夜の月を詠じてゐる。

山ざこのかべのやれ間のきりぎりす月もこゝよりさせよごぞ鳴く

又時として月見を約した人の來るのを待つた事もあつた。

月見んごちぎりしものをまほつ人雁はくれごこづけもなし

山へ水を汲みに行つて井戸の底に宿つた月を見て、

ひさごもて汲みもえつべきかけながらあはれは深し山の井の月

山ざさにひこりも月を見つる哉よよしご待人もなければ

ご獨り靜かに味はふ月もよかつた。

京洛の月夜もよかつたが、由緒ある明石の濱をさまよひし時の月も美しかつた。

ここのはの玉ひろはゞや秋のよの月にあかしのうらづたひして

くさまくら露にやされる月影はふるさこ人の袖もこふらん

こ秋の旅を詠じてゐる。

又かすかに聞へてくる入相の鐘の音に

たゞならず聞なされけり尾花ちる秋の野てらの入相のかね

古池にそらこ雁のかけみえて柳かつちる秋の夕ぐれ

山のはの夕べの雲のかけはしをつなぎてもわたる秋のかりがね

わが庭のははその紅葉はろくこ一葉づつちる秋の夕暮

こうして暮れて行く秋の夕焼は實に淋しかつた。

吹はらふ風に光はますかゞみちりもくらぬ秋のよの月

かく冴へ行く月燈の下で遙か遠くに、きぬたうつ音を聞く時はしみくこ秋の哀愁を味ふたであらう。

きぬたうつ音はからころからころもころもふけゆく遠の山ざこ

から衣うつおき聞ば袖のつゆくだけてものゝおもはるゝかな

時こしては我が賤家の夜もよかつた。

老てやむまぐらのしたのきりぎりすおなじ寢にきく人もなし

たびならぬまぐらのくさに虫鳴て秋あはれなる我いほりかな

或時は月のすべてを包容する偉大さに打れた事もあつた。

野に山にうかれくゝてかへるさをねやまでおくる秋のよの月

いにしへを月にまはるゝ心地してふしめかちにもなる今宵かな

常に心を樂しませ寂しがらせた月も時としては心を照し己が省録を促された事さへあつた。

ねがはくは月のかげにて秋しなんさらばやみにもまよはざらまし

何時しかすべてを月にうち任す身となつた。

くめぎもく乾く事なき詩魂の持主蓮月尼は、かく大自然を不請の友とし、蒼白きまでに澄み渡つた靜かに照された清い秋の月夜を心行くまで眺め心に宿し、歌つてゐる。

〔三〕

肩を並べるものなき歌人であり、熱烈な國土であつた尼は更に淨土願生者の一人であつた。尼が幼い頃平和をそれを搔亂する不幸の戯れの如き前半生涯を子供としての家庭生活の中に、大いに淨土教的色彩が織込まれた。それは父が知恩院の宮仕ひであつた爲、漠然としてゝはあつたが相當その事に親しみがあつたらうし、又孟母三遷の如く靜寂な寺の附近の生活は知らずく尼の心に淨土教的佛教色彩を植付けた。

この人知れない内に薰ぜられた色彩は不幸にうちつゞく不幸で、生來の潔白さが遂ひには、淨土願生者として眞葛庵の人たらしめたのであつた。

いろも香もおもひ捨たる墨染の袖だにそむる今日のもみぢば

こ詠じた様に之は心の更生の第一歩として、今日からは菩提心の色深く、遂には世の群萌を清く染めん其意を歌に讀んだのであつた。

此眞葛庵の生活は尼の心の道場として、之から後の日送りに多大の役割を演ずるのであつた。孝養と歌よみの間に、

父ミ共に念佛に看經に心をつくし、又夕焼の落日の莊嚴を遙か西に眺めつゝ山の大鐘に一日を送り、時ミしては朝霧を
ついて永遠に生ける聖宗祖、法然上人の御廟に詣でし事も、又雨の中を縫ふて本堂から流れてくる讀經や禮讃の聲に心
を打れた事もあつたらう。

こうした靜寂の心の宿を去り身を雲水の輕きに托し、金谷の花をもてあそびて遅々たる春の日をむなく暮し、或は
南樓の月をあざけりて漫々たる秋の夜をいたづらにあかし、詩を作り、熱烈なる國士として働いたミは云へ常に變らざ
りしは、佛を念ずる心の泉であつた。

はるけしミおもひし法のごもしびは心を照す光なりけり

法の道わけゆく末やながきよの夢もねざめのさこにいづらん

かく固い信仰を詠じながら身には放浪の旅がつゞけられるのであつた。この一期に尼は、禪、天台の方面の知友ミ交渉
があつた爲きつミそれが移植された様に思はれ、又餘生を送つたミ云ふ神光院は眞言關係であつた爲、此所にも又その
影響が見受けられる。斯の如く尼の宗教的經驗に三階段があつた。尼は決して一つを取り他を捨てるミ云つた人ではな
かつた。

あらゆる宗派的な觀念を超越して、唯釋尊の一代の法門を聞き一往は皆己が心の糧ミして、包容吸収した事は當然で
ある。然し信仰の中心はあくまでも淨土教であつた。それは尼の一生涯で一番よく信仰生活を營んだのは知恩院山内の
眞葛庵であつた。又和歌を通じ或は平生々活の中に、或ひは臨終の模様を見る時尼の始終は淨土教が中心ミなつて、そ
れに諸宗の教へを助道ミしてゐた事がわかる。

ちりほぎの心にかゝる雲もなしけふをかぎりの夕ぐれのそら

ねがはくばのちの蓮のうへにくもらぬ月を見るよしもがな

たてまつる香のけぶりの一すぢにをはりみだれぬ心こもがな

うるはしき佛のくに、おもふごち往きてすみなばうれしからまし

潔く生き抜いた聖蓮月尼は永遠に變らざれど其の身は八十五の高齡を一期として露に月宿しつゝ淨土の搖籃の地に遊ばんて此世を去り給ふたのである。時に明治八年十二月十日であつた。

眞の蓮月尼はもつこゝ、深く潔い聖女であつた。到底自分の筆のこどく所ではなかつた。かくも書き行く間に、近世の畫聖爲恭と蓮月尼との交遊の事なご父に聞きながら、蓮月尼の手によつてひねられた急須を前にして、

若はえの柳の糸のみじかくてふりわけ髪の心地こそすれ

の尼が若かりし時の追憶の和歌を縁字に詠じられしを讀みつゝ此斷片的小作を脱稿した。

すつこ先より鳴く虫の聲はまだ續てゐる。有明の月の消去るまで、鳴きあかすであらう。何時しか筆執る手に冬のつめたさを覺えた。

かうした潔い蓮月尼を書いた暮れ逝く晩秋は、一生のよき思ひ出となり、又秋の月を見る度に自分の貧弱な原稿を思ひ浮べて一抹の淋しさを感じる時もあらう。

願くは尼が如き潔らかさを我が心にも宿らせ給へ念じつゝ筆を擱く

— 完 —